

よう さん く
養 蚕 と 暮 ら し

稲城市東長沼2111
☎042-378-2111
発行 2007. 3.15



平尾の養蚕農家（蚕室と桑の刈り取り・昭和初期）

蚕を飼育して、繭をつくる作業を養蚕といひます。養蚕は江戸時代から農家の副業として行われていましたが、盛んになるのは明治時代になってからです。明治3年作成の「武蔵国多摩郡大丸村明細帳」（芦川家文書）には、「養蚕大凡壹ヶ年生糸五メ目生産種紙真綿等生産那シ」と記録されており、すでに明治時代初期には、養蚕による生糸の生産が行われていたことが判ります。

養蚕には、春の時期に行われる春蚕と農閑期に行われる夏秋蚕があります。春蚕の様子を順番に見ていきましょう。4月頃から蚕室の掃除や消毒をして準備を始めます。蚕種を入手し5月頃には蚕の卵がかえります。幼虫を蚕座に移し餌となる桑の葉を与えます。蚕は脱皮を繰り返して大きく育ちます。蚕は餌の補給、病気の予防、温度管理など大変に手間がかかり、家族総出の仕事になります。春蚕は25日間ほどで成熟し、5回目の脱皮（5齢という）から餌を食べなくなり、体が透明になります。1匹ずつわらで編んだ「まぶし」に入れると、やがて白い糸を吐いて繭を作りはじめます。蚕が作った純白の繭は、そのまま出荷したり、生糸にしてから売られました。生糸にする場合は、ナベで煮た繭から糸を取り出し、座繰器、糸繰器、糸車などの道具を使って生糸にしました。



坂浜でとれた繭

明治時代に入ってから稲城市域の養蚕の歴史をみてみましょう。稲城市域の農家で養蚕が盛んになる

のは明治20年代からで、特に日清戦争（明治27～28年）の頃から、第一次世界大戦（大正3～7年）頃に大いに発展しました。養蚕技術や製糸技術の改良が積極的に行われ、出荷する生糸の品質向上がはかられました。近隣にあった養蚕伝習所や養蚕試験所などの指導も大きな影響を与えました。なかでも明治27年に鶴川村（現町田市）に設置された鶴見川合資会社の影響は大きく、製糸技術の

大正時代の養蚕組合

養蚕組合	地域	組合員数	設立年月
金城社養蚕組合	平尾地域	22名	大正9年4月(1920)
坂浜養蚕組合	坂浜地域	20名	大正11年6月(1922)
大丸養蚕組合	大丸地域	52名	大正12年2月(1923)
中央養蚕組合	大丸地域	37名	大正15年3月(1926)

（『南多摩郡蚕業史』昭和2年より）

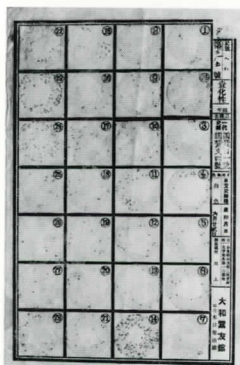
改良、資金援助、養蚕情報の提供、品評会、そして農事全般の改良・進歩にむけた取り組みが行われました。また、養蚕の発達とともに、温暖育（稚蚕の飼育を炭火などで暖めた部屋で行う）という飼育法が普及し、部屋を密閉するために、民家の構造にも大きな影響を与えました。

大正時代初期には稲城の養蚕農家は全農家の約40%を占めるようになりました。さらに大正時代後期には全農家の50%強に達します。養蚕は、坂浜・平尾・百村・大丸の丘陵地帯を中心として行われ、この地域には蚕に食べさせる桑の木を植えた桑畑が多く見られました。大正時代末期の頃には、稲城村のなかに四つの養蚕組合ができて、活発な活動が行われていました。養蚕組合では、収穫量の増大、春蚕のほかに夏秋蚕の急増などに対応して、共同蚕病消毒奨励、稚蚕共同飼育奨励、秋蚕専用桑園設置奨励、稲麦桑園共進会の開会などの活動が行われました。

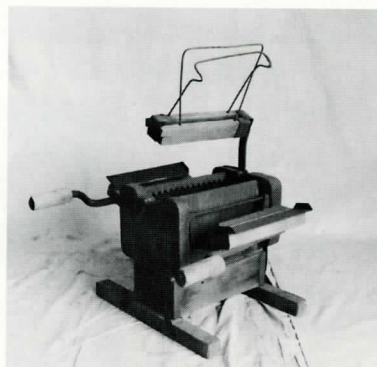
昭和に入っても養蚕の好調は続きました。しかし、1929年（昭和4年）に始まった世界恐慌の影響を受けて、翌昭和5年頃から農産物価格が暴落し、農業恐慌は深刻の度を深めました。特に最も深刻な打撃を受けたのが繭でした。恐慌前と比べると繭の価格は4割程度までに落ち込み、この状態がしばらく続き、昭和10年になっても回復しませんでした。養蚕農家では、少しでも収入を上げるために収穫量を増やす努力をしましたが、生産量が増加すると繭の価格が下がるという悪循環が続きました。

このように、稲城地域の農家で養蚕が行われたのは、明治時代から戦前（昭和10年代）までで、戦後になると需用が減ってほとんど行われなくなりました。

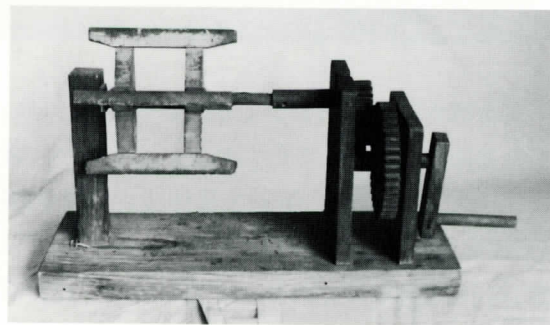
参考文献、『稲城市史下巻』（稲城市）、『稲城のあゆみ』（稲城市）



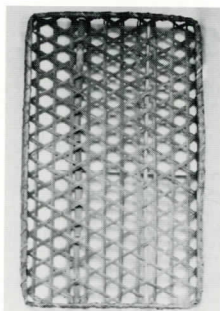
桑の種紙



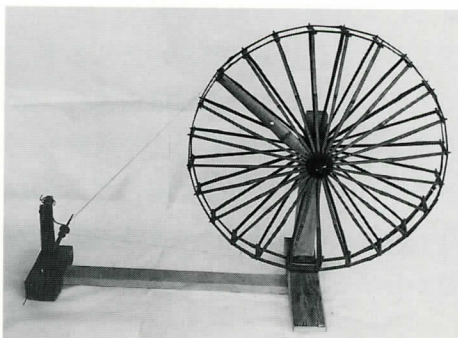
まぶし 蔴折り機



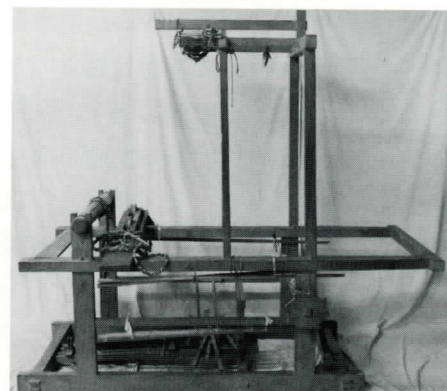
座操機



エビラ
(蚕に桑をあたえる台)



糸車



はた織機 (高機)